

キャンパスのカルト事情 オウム知らぬ学生増加

正体や実態を隠して近づき、大学生らを取り込む「宗教団体」が活動している。キャンパスの「カルト」事情を探った。

「これ、誰だか知っていますか？」。大阪府豊中市の大阪大豊中キャンパス。太刀掛俊之准教授の問い掛けに、バラバラと手が挙がった。「3割くらいかな」。大写しになっているのは「空中浮揚」する男。オウム真理教の松本智津夫死刑囚Ⅱ教祖名麻原彰晃Ⅱだ。

大型連休明けの土曜に開催された1年生対象の「大学生活環境論」。学生支援ステーションの太刀掛准教授らによる全学必修講義だ。飲酒、薬物、交通事故に関する注意が与えられたが、最も時間を割いたのは、いわゆるカルト問題だった。

カルトといえば、日本では地下鉄サリン事件のオウム真理教が代表的存在。大学は信者獲得の重要な場所であり、大阪大卒

業生を含む高学歴者が事件に多く関与したが、記憶は薄れつつある。

性的暴行で教祖が韓国で実刑判決を受けた「摂理」は、キャンパスでの布教が2006年に社会問題化。「宗教団体」をめぐる大学内のトラブルは絶えず、スポーツや音楽、ボランティアのサークルを偽装した勧誘も続く。「いろいろなカムフラージュ団体がある。問題は、コミュニケーションのルールを守らず、正確な情報を開示しないこと」と太刀掛准教授。

大阪大は早くからカルト問題に取り組んできたことで知られるが、太刀掛准教授は、信教の自由への配慮を強調した上で「カルト予防は大学の社会的責務」と訴えた。

「妻なやつが入ると思つてい



「虚しさ」とカルトの人間関係
虚しさ
思っていた大学生活と違う
打ち込むこと/話せる友人が見つからない
就職や将来に対する漠然とした不安
100%言意の「違法な」
宗教抜きにつきあえる
断ると相手に突
カルトの人間関係

「宗教学入門」の講義で「カルトに入るきっかけはささいなことから」と注意を呼び掛ける弓山達也教授＝9日、東京都豊島区の大正大

「オウムの現場から」正
常という神話は次回、6
月26日に掲載します。

正常という神話

野田文隆

サッカーの試合を見ているとアウエーで戦うことがいかに大変かを感じる。同じようなことを私は統合失調症という病気に感じる。統合失調症は100人に1人ぐらいの人がかかる比較的ポピュラーな病気なのに、99人はこの病気のことをよくは知らない。

それゆえ、この病気にかかると患者さんは完全アウエーの世界で闘病することになる。精神疾患とはいえず、他の病気は比較的わかりやすい。うつ病なら、気持ちの沈み込む病気が

不安障害なら、気持ちが不安でいっぱいになる病気といえは、たいいてい人は自分にもあることなので共感

苦しい「アウエー」の闘病

はできる。本人もさほどアウエー感をもたなくてすむ。
でも、幻覚や妄想から始まる統合失調症の世界を人はなかなか体験できない。体験できないと、病気に共感ができない。
数々の統合失調症の人と会ってい

ると、この理解されなさがどんなにきついか、身につまされる。ある人に「僕の病気をわかりやすい一言で表す言葉を考えてください」と訴えられたことがある。治療によって幻覚や妄想という症状はおさまっていくのだが、この病気の根幹にある「ひきこもり感」や「人嫌い感」は回復しにくい。回復には、ホームの人々の応援が必要なのである。それはただ「頑張れ」と励ますことではなく、ガラガラスタジアムにも足を運ぶサポーターの姿勢に似た、その人そのものの「価値」を認

め、粘り強く寄り添うことなのである。アウエーでなく、ホームで戦っている感じを持つと自信も出て、元気になる。

今、統合失調症の人たちは病気であることを下を向かず、立ち上がって社会に還るようになってきている。思えば、そういうプロセスは被災地の復興プロセスにも似ている。

人々は有形、無形の後押しを受けて回復していく。何年か前、この病気に関わるたくさんの人々が、この道筋を平たく言い当てたすてきなキヤッチフレーズで集会を開いたことがある。「みんなで歩けば道になる」というものである。

(精神科医、大正大教授)

びんか